

認定病院の 改善事例紹介 シリーズ

Improve

Vol.10
リハビリ
テーション
病院

紹介事例

特定医療法人 自由会
岡山光南病院

—患者さんに「安心」を届けるトータルマネジメント—

医療を見つめる第三者の目。
それが病院機能評価です。



公益財団法人 日本医療機能評価機構
Japan Council for Quality Health Care

<http://www.jcqhc.or.jp/>

日本医療機能評価機構

日本医療機能評価機構は、国民の健康と福祉の向上に寄与することを目的とし、中立的・科学的な第三者機関として医療の質の向上と信頼できる医療の確保に関する事業を行う公益財団法人です。



病院機能評価は、患者さんが安心して安全な医療を受けることができるように「病院の改善」を支援する仕組みです。サーベイヤーと呼ばれる専門調査者が病院を訪問し、病院の取り組みを評価します。病院外部の第三者機関による評価を上手く活用することで、これまで院内では気付くことができなかった課題や強みなどを明らかにすることができます。

評価の結果、一定の水準を満たしていれば「認定病院」となります。評価を受けることで明らかになった課題を改善し、認定を更新していくことで、継続的な質改善活動を行うことができます。

評価は、病院の特性に応じた6つの機能ごとに行われます。



第10号では『リハビリテーション病院』版の病院機能評価を活用して改善に取り組んだ事例を紹介します。

患者さんに「安心」を届けるトータルマネジメント

特定医療法人 自由会 岡山光南病院の場合…

急性期から在宅への橋渡し役となる回復期リハビリテーション病院。入院という非日常と、生活という日常の違いを踏まえ、退院後も続く患者さんの生活を見据えたリハビリテーションを提供する岡山光南病院のマネジメントを紹介します。



当院は、高齢者が多くお住まいの田園地帯にあります。主に脳血管疾患や転倒による骨折の急性期を都市部の大病院で過ごされたのち、生活圏に帰ってリハビリを受けたい地元のかたのニーズに応える役割を担っています。

開院以来36年、建物は若干年季が入っていますが、提供する医療は充実したものとなるべく努力しております。(宮森院長)

急性期から回復期リハビリテーション病院への機能転換

同院は、都市部からほど近い田園地帯に1981年、外科の診療所として開院し、その後急性期を担う病院となった。当時は患者さんの大部分が子どもや働き盛りの方だった。

その後、少子高齢化の進行に伴い、医療ニーズは脳血管疾患や転倒による骨折へと大きく移行した。こうした患者さんの多くは都市部へ行き、機能が充実した大病院で急性期を過ごすことを選択する。退院したのち地域に戻ってもリハビリテーションを受ける場所として、地域と共に歩んできた同院は、移り変わる医療ニーズを鑑み、回復期リハビリテーション病院への機能転換を決断した。

回復期リハの在り方を学ぶ

急性期病院からの機能転換の準備（2005年）にあたり、回復期リハビリテーション病院としての体制を作らなければならなかった。勉強会や研修会を通して在り方を学び、基準・手順を回復期リハビリテーション病院に合わせて整えていった。あるべき姿に向けて整備しなければならないことは山ほどあったが、「私たちがやらなければ誰がやるんだ」という強い思いと、同時期に病院機能評価の受審という、第三者評価の機会もあり、モチベーションが高まった」と、松井看護師長は話す。

トータルマネジメントが可能な体制整備

この転換期によりもたらされた変化は、役割分担の明確化と組織横断的な視点だ。回復期リハビリテーションのアウトカムに必須である多職種連携による患者状態のトータルマネジメントが実施できる環境ができた。病院機能の転換期に受審を経験し、体制を整備することで、回復期リハビリテーション病院として組織の土台を作り上げていった。

リハビリテーション部長の土手医師は2011年の入職時、回復期リハビリテーション病院としての機能が整っていると感じたという。



「患者面談やカンファレンスなどでストレスがない。職種ごとに役割が明確で連携するシステムが確立していることが、業務負担の効率化につながっており、非常に働きやすいと感じました。」
土手リハビリテーション部長（医師）

急性期病院からの厚い信頼 患者さん・家族が抱く安心感

回復期リハビリテーション病院としてのストラクチャーが整い、各職種の役割分担が明確となったことで、スムーズな多職種・多施設連携が実現した同院。

例えば急性期病院からの転院患者に対しては、フェイスシートや情報提供書といった書類の判定だけでなく、医療相談員が電話で、紙面にない家族関係や社会背景まで詳しく聞き取り、受け入れ可能な体制を整えるための検討材料を引き出している。紙での記載だけでは伝わりにくい情報が得られることで、一見難しいと思われる患者も「回復期リハビリテーション病院としてできることがあるのではないか」と受け入れてきている。

重症患者の転院先を探して苦労することが多い急性期病院からは、「リハビリがしっかりしている」「光南病院に任せたら安心」との信頼を得ている。同時に、その信頼感から、転院元の病院と漏れのない情報共有ができ、多施設連携を名実共に実現できている。

トータルマネジメントにあたるスタッフの思い

こうした医療提供に、各職種はどのような思いで業務に当たっているのだろうか。共通するのは、「患者さんの生活をみる」という意識だ。

中尾リハビリテーション部主任は、「多職種連携において、作業療法士はただのADL屋さんではないと思っています。」と話す。単にADLの改善や退院を目指すだけでなく、さらにその先に続くご自身の生活に戻ったとき、どのような生活を続けていくのか、患者ごとにベストを探り、生活の視点を見据えたリハビリテーションを、多職種とマネジメントすることを目指しているという。



「大変な経験をされた患者さんに、この先も続く生活のため、できる限りのことを病棟でフォローしたいと考えています。」中尾リハビリテーション部主任（作業療法士）

看護部では「365日いつでもしてよい症例検討会」の取り組みがある。どのように患者さんの情報収集を

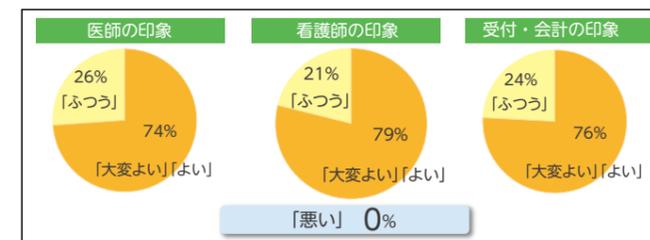
して退院支援につなげるか、具体的な方策を話し合う場だ。ベテランと新人で知識の違いによりケアの質が異ならないよう、それぞれの視点で意見交換し、互いに学びあう。検討会を開きたいスタッフがその旨を病棟管理日誌に記入すると、その日に勤務している看護師が参加することで、変則3交代の勤務体制のなかでも「いつでもできる」環境を作った。

「患者さん・ご家族としてはベテラン看護師のほうが安心できるかもしれません。情報共有しやすい場を作ることで、どの看護師がケアをしても同じ看護レベルが保たれ、安心していただけることを目指しています。」（松井看護師長）



勤務8年目になる西村地域連携室リーダーは後輩に常々「患者さんにとって本当のリハビリは退院後に始まる」と指導している。例えば入院中は毎日リハビリがあるのでしっかり動くが、在宅に移行すると入院中と同じようには動かないのでADLが下がることが多々ある。退院まで、そうした事情も踏まえて支援する必要がある。現在同院では、在宅復帰率は維持されているので、今後はさらに「帰りたい、という希望にもっと寄り添えるよう、自宅復帰率を上げていきたい」と西村地域連携室リーダーは意気込みを話す。

こうしたスタッフの取り組みにより患者さん・家族が得る安心感は大きい。多職種のスタッフによる支えのもと、患者さん自身が「しっかり治したい。一つでもできることを増やしたい。」といった希望を持って積極的にリハビリに向き合うことができる。



(図)岡山光南病院における患者満足度調査
実施期間：平成27年10月4日～11月14日

医療の質を更に高めていく仕組み

「誰がケアしても同じ質」を徹底

高齢化がいつそう進展する今後、患者数の増加、認知症の問題や転倒骨折の再入院率上昇などが予測される。地域における同院の責務はより一層高度化し、拡大していくこととなる。そのため同院は、病院機能評価の受審を通して整備された手順や研修など、体制をさらに強化し、「誰がケアしても同じ質」を目指し、今後も病院機能評価を活用していく。

より多くのスタッフが受審経験を

こうした取り組みにあたって同院は、より多くのスタッフに病院機能評価の受審担当を経験してもらいたいと考える。入職後、一通りの業務経験を積んだ職員が、病院機能評価の受審準備に関わることで、自身の日常業務だけではなく、病院全体の動きを知り、包括的な考え方をする視点が養われる。本来であれば同時期に受審することも多い、本審査と付加機能審査の受審時期をあえてずらし、病院機能評価の受審準備に関わる職員を増やす工夫も。中尾リハビリテーション部主任も2015年度の受審で初めて、受審準備の担当者として関わったという。「受審担当として関わる中で、これまで自分が担当してきた業務についても、組織の中での意味を深く理解できたことが良かったと思います」と話す。このような取り組みの中で、徐々に広い視野を持って病院運営に関わる職員が増えていく。

職員のなかには、リハビリテーション病院でのキャリアが浅い、という人も多い。同時に「リハビリテーション医療をやりたい」と新しい職員もどんどん入ってくる。馬淵事務長は「病院機能評価の受審という一つの尺度を通して、自分の病院の取り組み、提供する医療・ケアはどれだけ良いものなのか、に新たな気付きを持つことができる。」と語る。巧みな多職種連携によるトータルマネジメントを実現するにあたって、病院全体の動きの把握は非常に重要だ。病院機能評価の受審を活かした組織の成長は今後も続く。

病院機能評価受審の効果

刻々と変わりゆく医療ニーズに対応して、評価機能が変わってくれるおかげで常に地域に「安心」を届けられます

同院の病院機能評価受審を決めたのは前院長。小規模な病院だったが、組織横断的に医療の質を向上させることに困難感を抱いていた。医療安全から見直せばよいのか、感染対策からがよいのか？漏れなく全体的に医療の質を底上げするにはどうすればよいのか？方策を探していたときに出会い、最良のアイテムとして取り入れられたのが病院機能評価だった。

同じ方向を向くことでモチベーションが上がる

最初の受審後、同院は急性期から回復期へ機能転換を行うこととなる。急性期スタッフとして真摯に取り組む日々を送っていたスタッフの中には、モチベーションが低下するものも。そんななか病院機能評価の受審は、スタッフ全員が同じ方向を向くことを後押しし「私たちがやらなければ」という強い意が生まれることとなった。

受審間隔の短縮でさらに医療の質向上

医療機能評価には、5年に1度実施される「本体評価」に加え、救急医療機能、リハビリテーション機能（回復期）に特化した「付加機能」の評価がある。同院はリハビリテーション機能を



受審している。2～3年ごとにどちらかを受審するように受審時期をずらすことで、時代の求める医療により俊敏に対応し、いっそう医療の質の向上へつなげる工夫を行っている。

「正直、準備は大変です」と同院スタッフは顔を見合わせて笑う。受審の準備にかかる期間は約1年。負担がないとは言えないがその効果は、日々業務で実感しているという。

評価項目が変わるからこそ

診療報酬が定期的に改定されるのと同様、機能評価の項目は医療環境の変化に応じて数年ごとに改定されている。今後、回復期リハで予想されるのは骨折の再入院や認知症例の増加とこれに伴う医療安全問題の深刻化など。退院支援が困難化するであろうなか支援を充実させていくため、同院は、機能評価を受審し続けることが、社会が求めるニーズの変遷に対応することになると考える。

「機能評価の内容が変わらず、古いままであれば、受審を続けることはなかったかもしれませんが」と廣金看護部長は話す。時代に合わせた医療を確実に提供する病院であり続けることができるという、受審に対する信頼の一言だった。

病院概要

平成29年2月28日現在

病 院 名	特定医療法人 自由会 岡山光南病院		
理 事 長	橋本 俊明	院 長	宮森 政志
所 在 地	〒701-0211 岡山県岡山市南区東畦767-3 TEL 086-282-0555 / FAX 086-282-0595		
開 設	昭和56年5月		
病 床 数	44床		
標 榜 科 目	内科・循環器科・呼吸器科・消化器科・整形外科・リハビリテーション科		

編集後記

病院の皆さんのお話の中で印象的だったのが、「我々がやらなければ誰がやるんだ」という、自院の役割とあるべき姿を明確に持ってあり、理想に向かって日々の医療に取り組んでいる、というところでした。医療に求められるニーズが多様化する中、やるべきこと、やらなければならないことを明確に職員全員で共有している、という感想を受けました。組織として、医療機関として、ある一つの理想の姿であると思います。

そんな理想に向かう為に、常に最新の医療環境を維持するために病院機能評価を利用されている姿を見て、評価機構自身も、時代に合わせた審査手法、評価項目を提供していかなければならないという、我々の使命と課題も同時に突きつけられたようにも感じた次第です。 (二宮 史彦)

バックナンバーのご案内

バックナンバーは評価機構のホームページよりご覧いただけます。

<http://www.jcqhc.or.jp>



- Improve Vol.9 一般病院2 (2017年3月発行)
《紹介事例》彦根市立病院
一病院主導のマニュアル活用で地域包括ケア構築を一
- Improve Vol.8 精神科病院 (2017年1月発行)
《紹介事例》医療法人成精会 刈谷病院
一ゆたかな心で地域とつながり、癒やす。寄り添う。守る。育む。一
- Improve Vol.7 慢性期病院 (2016年10月発行)
《紹介事例》医療法人社団 廣徳会 岡部病院
一地域に根ざした患者中心の医療を実現する院内教育一
- Improve Vol.6 一般病院1 (2016年5月発行)
《紹介事例》医療法人清仁会 洛西ニュータウン病院
一退院後も続く、患者との絆を結ぶチーム医療一
- Improve Vol.5 リハビリテーション病院 (2016年1月発行)
《紹介事例》鶴岡市立 湯田川温泉リハビリテーション病院
一「患者とともにある医療」をチームで推進する一
- Improve Vol.4 精神科病院 (2015年10月発行)
《紹介事例》医療法人社団光生会 平川病院
一チーム一丸となって患者の不安を取り除く一
- Improve Vol.3 一般病院2 (2015年5月発行)
《紹介事例》国立大学法人 信州大学医学部附属病院
一自発的な内部監査によって病院全体の質向上一
- Improve Vol.2 一般病院1 (2015年2月発行)
《紹介事例》医療法人杏仁会 松尾内科病院
一10年ぶりの第三者評価で強みと弱みを再発見一
- Improve Vol.1 慢性期病院 (2014年12月発行)
《紹介事例》医療法人社団明芳会 新戸塚病院
一改善風土の定着が組織を革新一



日本医療機能評価機構 認定病院の改善事例紹介シリーズ

Vol.10 リハビリテーション病院

2017年7月発行

発行：公益財団法人 日本医療機能評価機構
〒101-0061 東京都千代田区三崎町1丁目4番17号 東洋ビル
TEL：03-5217-2320 (代) / 03-5217-2326 (評価事業推進部)
<http://www.jcqhc.or.jp>

